

生活 & 総合 navi

vol.74 FEBRUARY 2018

【特集】

生活・総合は おもしろい。(前編)

【連載ページ】

Belief

カリキュラムマネジメントゼミ

アクティブ・ラーニング教室

研究と実践

ご当地情報局

生活・総合への提言

保育所、幼稚園の現場から

生活科を理科とつなぐ・社会科とつなぐ

本資料は、「教科書発行者行動規範」に
則り、配布を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

日文

検索



ママは日本代表

リオオリンピックフェンシング日本代表

佐藤 希望

さとう のぞみ

福井県生まれ。武生商業高、日体大卒。2009年からOKB大垣共立銀行に所属。大学3年だった2007年に全日本選手権初優勝。2012年ロンドンオリンピック出場・2016年リオデジャネイロオリンピック8位入賞。結婚出産を経て2014、2015年、全日本選手権で2連覇。2015年アジア選手権個人、団体で銅メダル獲得。2012年には越前市初の市民栄誉賞を授与されている。(旧姓：中野希望)



撮影者：竹見修吾

フェンシングとの出会い

中学生の時、教室の掲示板に高校のフェンシング体験入部の張り紙を見つけました。フェンシングなんてやったことも見たこともなかったのに「どんなスポーツかな？」と興味を持ち体験入部に行くことにしました。

その高校は全国大会で何回も日本一になっている強豪校でした。体験入部でフェンシングをしてみたところ、元々剣道をしていたこともあり、すごく楽しくて私に向いているような気がして「やってみたい！」「私も日本一になってみたい」と思いフェンシング部に入部することを決めました。

時間をやりくりする 日々がプラスに

しかし、剣道指導者をしていた父にフェンシングを始めることを猛反対されてしまいました。そこで父に認めてもらうために高校の3年間で「日本一になる」と約束をして、私のフェンシング人生が始まりました。

結婚…そして育児との両立

独身だった時でさえロンドンオリンピックに出場するのは大変だったのに、長男を出産して2年間もブランクがある中、現役に復帰してふたたびオリンピックを目指すのは並大抵のことではありませんでした。

いままでは全部自分の時間で自由にトレーニング出来ていましたが、子どもがいるとどうしても時間は限られてしまう。練習時間をどう捻出するかが悩みでした。そんな中、ダラダラと長い時間練習するのが良いのではないことに気が付き、常に短期集中し、課題を決めて練習をするようになりました。結果、子どもが出来てからの方が「オン」と「オフ」がはっきりしていて頭の中も整理されフェンシングの成績が上がっていきました。子どもも「ママ練習がんばって！」

未来の日本代表へ

私自身が子どものころ日本代表になって海外を巡ることになるなんて思ってもいなかったのに、学生時代に英語の授業はあまり熱心ではありませんでした。でも、今では日本代表として年10回以上海外に行くようになり「ちゃんと英語の勉強をすればよかった」と後悔しています。いまでは誰でも簡単に海外旅行に行けるようになっていきますし、子どものときから英語を勉強していると必ず役に立ちます。

子どもたちにはいろいろなことに気付き、興味を持ってどんどんチャレンジしてほしいです。そして、努力をすれば、必ず全部自分の力になるので「諦めない心」で頑張っていってほしいです。



Mita Hiroki

対談

Suzuki Noritomo

生活・総合はおもしろい。



Suzuki Akinori

前編

Ogasawara Sachie

新学習指導要領全面実施を控え、平成30年4月よりいよいよ先行実施期間を迎える。生活科・総合的な学習の時間はどのように変わっていくのか。学びの本質は変わらないのか。そこで今回は、現場でご活躍の先生方4名に集まってもらい、今何を考え、実践すべきかについて熱く語ってもらいました。「生活・総合のおもしろさ」を前編・後編2回にわたってご紹介します。

子どもがこうなってほしいという姿を具体的にイメージして

三田 先日、新宿区の若い先生方と話をした時に、どうしたら多くの先生に生活科や総合的な学習の時間のよさをわかってもらえるかアイデアを出してもらったんです。そこにいた方々は、生活科や総合に意欲がある先生ばかりで、自分から先輩教員の授業を観察したり、指導案や実践事例集などを読んで自ら研鑽を積む人たちです。しかし、所属する学校には、様々な理由から生活科や総合に明るいイメージをもてていない先生もいて、実践事例集をすすめてもじつくり読んでくれる人は多くないのが現実だそうです。では、どうすればよいイメージをもってもらえるのか、そこで、出たアイデアが漫画くらいビジュアル的でわかりやすいものであれば興味をもって読んでもらえてイメージが伝わりやすいというものでした。それならば自分たちもそれを基に

説明しやすいし、学びにストーリーがある生活科や総合だからこそよいというのです。極端ではありませんが、妙に納得してしまいました。

みなさんはどのようにして生活科や総合の単元づくりをほかの先生方にイメージしてもらったのですか。
鈴木紀知 以下鈴木(紀) 単元構想について先生方と話をしているときは、よく子どものイラストを描きながら吹き出しをつけて、「こうしたら、こうなるね」「最終的に、この授業の終わりになんて言うたら、オッケーなの？」みたいな話をするので、意外と、「真」なのかなと思いますね。

鈴木暁範 以下鈴木(暁) 私もうするようにしています。絵が拙くても、わかってもらえることが多い気がします。

三田 生活科も総合も学びのプロセスを大事にします。教師が単元のイメージをはっきりもつことは大切なことですね。でも、プロセスを丁寧に描けば、実際の子ども

子どもたちにはこうなってほしい。

育てたい資質・能力とは

の姿とズレが生じた場合困惑する教師もいる。そういう意味においても、どのような子どもを育てたいのかということが明確になっていくことが前提となりますね。

鈴木(暁) そうですね。生活科や総合で何がしたいかという以前に、次に受け持つことになった目の前の子どもたちを、どうしていきたいかということをまず考えますね。それで、こういう風にしていききたいなみたいな漠然としたイメージはもっている気がします。「どういう子どもにしたいか」がなく、「何をしたいか」から始めてしまうと、結局、大事な流れからどんどん逸れてゆく。核になる「目指す子どもの姿」がぶれないようにしたいですね。

鈴木(紀) 生活科でも総合でも、実生活や実社会の関わりが重要だと考えたときに、「当然こうなっていると関わりがよくなる」とか、「このままで大人になったらこういうことで困りますよね」ということをより強く意識しています。

小笠原 私が生活科を始めたばかりの頃、子どもの言葉や子どもの姿で描かれた単元イメージ図を見て、「生活科って、子どもがこんなふうになるようにしていくんだ」というイメージをもてました。ですから、生活科を始めたばかりの先生にも子どもの姿をイメージできそうなものに出合ってほしいですね。

生活・総合は生活を豊かにする。

三田 ほかの教科よりも人間全体としての姿を求めている生活科や総合だからこそ、まずは、育てたい子どもの姿を明確にすることが重要で、総合というならば、そこに探究課題や内容を合わせていくという段階を踏むということですね。このことは資質・能力の三つの柱があつて、内容があるという次期改訂の趣旨とも合致しています。

小笠原 私は、生活科を通して自分の生活を楽しむ豊かなものへ変えていってほしいと思っています。

三田 生活を豊かにするとは？

小笠原 例えば、生活科で花を育てるようになってから、花を見たいだけだと思つていなくなつたり、公園などで花を見て改めて、「これは何の花かな？」と思つていくなつたり、また、家でも花を育ててみたりと、生活が豊かに広がっていきます。そういう子どもになつてほしいと思つています。

鈴木(暁) 地域に地区センターが

目指す子どもの姿っていうのは、ぶれないようにしたいです。

まずは、育てたい子どもの姿を明確にすることが重要ですね。



三田 大樹

新宿区立大久保小学校 主幹教諭

大学4年生の夏、母校の小学校でプールの指導員をやっていた頃、先生になろうと思いました。教育実習校の先生方の姿を見て、教師という仕事は「カッコいい!」と思えたからです。



鈴木 暁範

横浜市立大岡小学校 主幹教諭

大学4年生のときにゼミの先生が、様々な実践の場に連れて行ってくださり、当時出会った先生方の仕事に魅力を感じて先生になろうと思いました。

あるんですけど、子どもたちが集まってゲームをしているんです。地区センター自体のよさはもちろんありますが、それ以外にも大岡川とか、いろいろなことができる場所があるんです。だけど、子どもたちは全然行かなくなっています。そういう場所にこそ、魅力を感じて、地域で遊んだり、学んだりする子どもになってほしいなと思いますね。

鈴木(紀) 私の小学校では、去年から、研究主題を「夢をもち、夢を実現する子ども」にしているんですが、それは、私が15年間生活科、総合を実践してきた、一番大事だと思つていることなんです。簡単に言うと、「やりたいこと」をちゃんとやれるという経験をした大人が増えることで、世の中がよくなることになるのかな、と。他人にとつても自分にとつても意味がある、そんな質の高い「やりたいこと」をもてる子どもになつて欲しいと思います。そして、そのやりたいことをちゃんと実現するために、問題を見つけたら、人と協力したり、ということができるようになってもらいたいですね。

鈴木(暁) 大岡小学校で、私の学級はミツパチを飼っています。活動の中で、「地域の環境にもっと目を向けようよ」と投げかけても目の前のハチの飼育で精一杯だった子どもたちが、蜂蜜を採って食べた瞬間に「これは、何の花からできているんだ?」と自ら関心をもつわけです。地域の蜜源を調べると言つて、放課後や夏休みに、町中を歩いて花を探している子どもまでいるんです。花を見なさいって言つても花を見なかつたのに、自分の生活の一部として意味を感じると、自然と学びに向かうし、そういう子どもたちに育つてほしいですね。

小笠原 現在、2年生で「自然や物を使った遊び」の単元をしているのですが、「ゲーム以外の遊びに魅力を感じてほしい」ということを自分のサブテーマにしています。単元が始まる前のアンケートでは、好きな遊びをゲームと答える子が一番多いんです。自然の不思議さや面白さに気付いてほしいというのものもちろんありますが、「身の回りの物を使ってこんなに楽しく遊べるんだ」ということを感じてほしいです。

三田 なるほど、生活を豊かにするっていうイメージが先生ご自身にあるからこそ、すべての単元がそこに向かっていくように単元を繋いでいくことができるのですね。

小笠原 そうですね。

三田 お話を伺ってきて、育成すべき資質・能力の三つの柱を前提にするというよりは、目の前の子どもの姿から「こうなってほしい」という大きなビジョンがあって、そこに資質・能力の三つの柱を合わせていく感じでしょうか。紀知先生の学校では、ずっと学校として大切にしていることがあるとか。

鈴木(紀) 先ほどお話したことと重なるのですが、「やりたいことをやるのが生活科・総合だ」ということを学校で言い続けています。そして、そのやりたいことを意味・価値のあるものにしていくんだ、と。その考え方がずっと続いていくようにしたい、というのが、今の研究主題の設定に繋がっています。

生活・総合で資質・能力の三つの柱を育成する

三田 今、皆さんが仰ったことを、育成を目指す資質・能力の三つの柱とつなげて考えるところのように整理できますか。

鈴木(紀) 「夢をもち、夢を実現する」という研究主題を設定した時には、現行の指導要領をすごく意識していたんですよ。その頃、「内容と資質・能力が両輪だ」とってところがよく言われていたと思うんです。それで、意味・価値のある内容を学ぶことが、質の高い夢をもつことにつながり、資質・能力を育成することが、夢を実現する力

につながる、と、きれいにリンクする、と想っていたら、指導要領が変わっちゃった(笑)。でも、新しく示された、知識・技能、概念や、学びに向かう力・人間性、の部分は「夢をもつ」につながり、思考力・判断力・表現力は、「夢を実現する」のところにつながるな、と。自分の中では整理はついていると感じています。

鈴木(暁) うちの学校では、「ともに学びをきりひらいていく子ども」の育成」という学校教育目標がありますが、ぱっと聞いた感じ、抽象的でもあるので、教師も子どもも常にイメージしやすいように「求め続ける子ども」「創り上げる子ども」「共に生きる子ども」という子ども像を設定しています。「求め続ける」は、学びに向かう力、人間性につながります。「創り上げる」と「共に生きる」は、仲間と対話しながら何かを生み出す思考力、判断力、表現力につながると思います。そしてこのような学びの中で、知識が伴わないはずがないだろうと考えています。

小笠原 以前は「生活を豊かにする」というと「学びに向かう力」を育てていこうとしていたのだと思っていました。やはり三つがあって「生活が豊かになる」のだと思います。

三田 「生活を豊かにする」ということに他者との関わりは入ってきますか？

子どもの発言は本来楽しいはずだから、それを思いっきり楽しみましょう。

活動を通して楽しさを感じ、自分の生活を豊かにして行ってほしい。

鈴木 紀知

横浜市立戸部小学校
主幹教諭

5年生の時、在校生として参加した卒業式で6年生の担任が泣いているのを見て、大人の男性が号泣している姿に衝撃を受け、漠然と、いい仕事なんだろうな、と思って先生になると思いました。



小笠原 さちえ

大田区立久原小学校
教諭

小学校の卒業文集に「幼稚園の先生になりたい」と書いた気がします。幼稚園教諭として10年間勤務した後「幅広く子どもたちと関わる人になりたい」と思い小学校の先生になりたいと思いました。



小笠原 そうですね。「みんなで活動したから楽しかった、いろいろできた」と感じたり、「自分たちのことをいろいろな人たちが見守り、支えてくれている」と気付いたりすることで生活が変わってくると思います。

三田 求め続けるためには他者との協力が不可欠になりますし、より自分の幸福を創造するということは、同時に他者の幸福についても考えていくことにつながっていく。こうしたことが、生活科や総合においては大切にされているという強いメッセージを押し出していると思います。



「求め続ける」ことで学びに向かう力、人間性につながる。そして「創り上げる」「共に生きる」ことは、仲間と対話しながら何かを生み出すことにつながると考えています。(鈴木 暁)

鈴木(暁) 夢を実現するためには必ず他者と協力する。ということですね。

三田 私たちとしては、そういったことが生活科や総合で大事なことでだというイメージをもっているという捉えでいいですかね。それは学年や発達段階によって変わるとは思いますか？

発達段階による違いはない？

小笠原 自分たちの生活の中から「やりたい」ことを見つけて活動し、自分の生活や生き方へつなげる。この点においては、どの学年でも同じだと思います。

生活・総合の楽しさを伝えたい。

— 学びに向かう力を見据えて —

ありますね。

生活・総合は楽しい

鈴木(紀) 今回(平成29年11月)、全国大会で公開授業をするにあたって、相当プレッシャーが大きくて、吐きそうになりながら…(笑)。

でも、校内で最後に職員に言ったのは、「授業を楽しみましょう」ということでした。子どもの発言は、本来楽しいものはずだから、それを思いっきり楽しませよう、と。例えば教科では、この1時間でここまでたり着かなきゃいけない、というものが明確にあると思いますが、総合ならばもう少しロングスパンというか、子どもがゆっくり成長するのを待てる。この方法じゃないんだ、と気付いたら、同じ資質・能力が身につくのであれば、違う方法をとる、ということがやりやすいと思うんです。子どもに合わせて授業もできるし、単元もつくっていいける。子どものありのままの姿を楽しめる、という点は、生活科や総合が一番大きいのかなと思います。

三田 確かにほかの教科と違って子どものありのままの育ちに寄り添えるというよさはありますね。

鈴木(紀) うちの学校では「学びどころ」っていうのをずっと大事にしています。例えば、教科で8

時間の単元をやるとしたら、1時間1時間、8時間分の計画を具体的に考えると思っんですよ。でも、総合70時間分の1時間1時間の計画をつくらうとするのって、かなり難しいと思うんですよ。子どもの思いから単元を立ち上げて、最終的に単元目標に示した目指す子どもの姿が具現化されるまでの間は全部細切れにつくっていくことは恐らく無理でしょう。そんな計画を立てたら、子どもに無理を強いったり、せつかく子どもが面白いことを言っても取り上げられず、「そんなこともあるよね」で済ませてしまったり。だからといって、まったく見通しが必要なければ、子どもの求めに応じて這い回って何も学ばずに終わってしまうかもしれない。だから、「これは確実に学ばせたいな、やらせたいな」という、単元の核になるような場面を、三つから五つ程度「学びどころ」として明確にもつ。そうすることで計画の幅を大きくもちましよう、という話を、校内研究のときにはしています。

小笠原 最近、教師の見通しが大切と言われますが、細かくつくり過ぎるとそこ向かわせようとし過ぎるのではないかと気がします。生活科や総合的な学習の時間は、目標に沿いながらも、でき

鈴木(暁) 私もそう思いますね。生活科って、自分の周りにあるものを生活の中に取り入れて気付きを深めていく学習だから、子どもの生活そのものが学習ですよ。見るところは、自分の生活だったり、暮らしをどうつくっていくかというところ、様々な教科の見方や考え方が使われます。総合的な学習の時間は、まさにそういった教科の見方や考え方を総合的に活用して学んでいこうという時間です。生活科は「生活」という対象がそのまま教科名になっていて、総合は学び方が名称になっていますが、結局両方生活で、総合なんじゃないかと、校内でも話題になっていました。切れ目はなくしたいんだけど、変に意識してしまうところもあるんですよ。

三田 そうかもしれませんね。

鈴木(紀) 同じ考え方だと思っんですけど、うちの学校では、長く生活科・総合の研究してきた中で、生活科と総合で共通の資質・能力の系統表を活用してきました。でも、新しい指導要領で総合の資質・能力の捉えが変わったり、設定の仕方についてこれまでの指導要領よりも具体的な例示が出てきたりして、既存の考え方で説明しづらい部分が出てきたんです。

とはいえ、指導要領に沿ってそれぞれの特性を理解して、それぞれに計画を立てることも大事だけれど、1年生から6年生まで子どもを育てていくときには、すべての担任が同じ子ども観、学習観で授業づくりや単元づくりをしていくことが極めて重要なことなんじゃないかと思っています。そういった、生活科と総合をつらぬく考え方を、どう説明・発信すればよいか、全国大会を受けるにあたってすごく悩んだところです。

三田 今回の改訂を受けて、今まで以上に生活科や総合の独自性やよさについて再確認し、それを強いメッセージとして発信していく必要があると思っています。例えば、今、主体的・対話的で深い学びによる授業改善をどの学校でも推し進めています、それを具現化している子どものイメージを語るるとき、明らかに他教科では見られない子ども姿があることを私たちは感覚的につかんでいることではないでしょうか。わかりやすく言うと、他教科に負けない生活科や総合のウリとなる部分をもっとメッセージとして強くアピールする必要がありますと思うのですが、みなさんはいかがですか？

小笠原 そう思います。生活科や総合の楽しさを伝えていく必要が



るだけ子どもたちに合わせていく
ことが必要だと思います。

三田 そうですね。細かくすれば
するほど具体的な手立てをイメー
ジすることはできる。でも、子ど
も実際の動きと乖離した状況も
生まれやすくなる。子どもに寄り
添っていく教科、領域だからこそ
教師には大きな見通しの中で、子
どもの実態に応じて柔軟に対応し
ていく授業力が求められますね。

鈴木(暁) うちは「どんな問題に
「出合うか」を想定しています。あ
とは、専門家との関わり。この人
のこういう価値観に出合っていき
たいみたいなことは押さえていま
す。全部道を引くのではなく、必
要なガードレールだけを押さえど
ころとして設定しておき、試行錯
誤しながら進んでいく子どもたち
を、ちゃんと構えて見ていきたい
と思っています。それが子ども「楽
しい」につながると思っています。
三田 小笠原先生は若い先生たち
に生活科が楽しいって思ってもら
えるように話をするならどんなこ
とを伝えますか？

小笠原 生活科の指導案や単元
イメージ図などをつくる際には、
必ず子どもの言葉や子どもの姿で
考えています。「子どもがこうして
次にこうなって…」と考えていく
のは楽しいですね。

三田 でも、それがわからない先
生には、どのようにして生活科の
楽しさを伝えればよいでしょうか。

例えば、先生の生活科ってどんな
風に自分が豊かになっていくん
ですか？

小笠原 私は、花や季節のことは、
元々好きで興味がある方かなと思
いますが、生活科をするようになって
から、野菜を育てるのも面白い
し、図書館の人とも仲よくなれま
した。動物もますます好きになっ
てきました。遊び単元では、素材
遊びで子どもたちが次々に新しい
遊び方を考えて教えてくれたり、
つくり始めるとどんどん工夫し、
私の想定をはるかに越えて面白い
物をつくっていた。「こんなに楽
しく遊べるんだ」と私自身もいろ
いろな物の見方や考え方が広が
りました。生活科のおかげで生活が
楽しく豊かになったと思います。

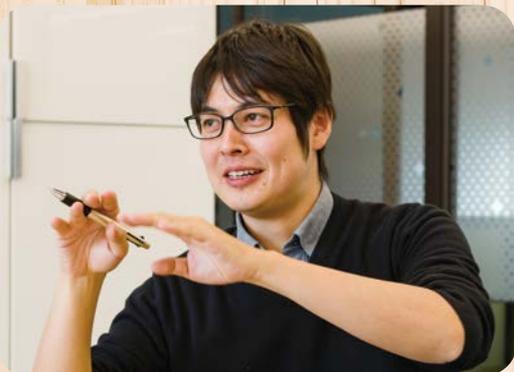
三田 先生自身の見方や考え方が
広がっていくというのは、なるほ
どって思いました。子どもと一緒
に先生も人として豊かになってい
くというのは確かに大きなメッセー
ジになりそうです。

鈴木(暁) やりたいことができたと、
子どもたちが1年かけて一つの
願いを叶えていくことを大切に
しようと言いたいんです。ほか
の教科等では、教師が知っている
学習内容を、知っているものとし
て、いかに効率よく気付かせてい
けるかということを考えてしま
います。それも大事ですが、生活科・
総合の面白いところは、子どもた

全国大会での公開授業で最後に職員に言ったのは、「授業を楽しみましょう」ということ。子どもの発言は本来楽しいはずだから、それを思いっきり楽しみたいよ。 (鈴木 紀知)



生活科や総合と出合って自分自身の生活も楽しく豊かになりました。(小笠原 さちえ)



ちと一緒に学んでいくことができ
るところだと思っています。一緒
に感動できるのか、最後は思いが
けない出来事に「やったね」って
思ったりとか。もう一つ、教師が
「開く」というか、教師自身が社
会と関わっていくことが非常に大
切です。総合では、地域社会と関
わりながら学ぶことが多いですが、
その関連で教師がそこにいる社会
人と話すことって楽しいですよ。
養蜂活動の際に、専門家の方と関
わっているのですが、彼の「僕は
養蜂家じゃないよ。養蜂を通して、
都市部に暮らす人々が、どうつな
がってゆかかということをコーデ
ィネートしたいんだ」という言葉を
聞いて感動しました。子どもに出
合わせたい言葉ですね。こういう
出会いからまた教師として知識を
得て、自分自身としても学ばせて
もらっているところが、わたしは
楽しいと感じています。

三田 生活科や総合を実践するに
は、学校が地域や社会と積極的に
関わる必要がある。子どもは、地
域や社会と直接関わることで、地
域への愛着が増し、高学年にもな
れば、社会貢献の意識を高めてい
きます。様々な人と出会い、経験
を重ね、獲得した知識がつながっ
て深い学びになるのが理想でしょ
う。そのために、教師もまた、学
校の中で閉じた教育活動をするの
ではなくて、地域や社会といった
大きなものにつながっていかなく

ればなりません。そうすることで、
私たち教師のこれまでの指導観そ
のものをよい意味で変えることにな
りますし、地域社会を含む人、
もの、ことを学習材とするマネジ
メント力の向上にもつながります。
まさに、生活科や総合は子どもに
とっても教師にとっても価値ある
ものだとこのことが言えますね。「楽
しい」っていうのは、子どもとと
もに成長していけるといことだ
と思います。ここにも生活科や総
合のよさや醍醐味がありますね。

次号予告

次号で対談の後編をお送りします。

後編では、4人の先生方が授業を組み立てる際、
実際にどんなことを考えているのかを、それぞれ
図式化していただきます。

- いつもは見えない先生の頭の中を「可視化」して掲載!
- 子どもたちが教師の想像を超える瞬間とは!?

…ご期待ください。



Curriculum management seminar

村川先生のカリキュラムマネジメントゼミ



村川 雅弘

甲南女子大学教授、鳴門教育大学
名誉教授・客員教授。専門は教育
工学、カリキュラム開発、生活科・総
合的な学習。近著に『ワークショップ
型教員研修 はじめの一步』（教育
開発研究所）がある。

学級のカリキュラムマネジメントから 始めてみよう

【学級のカリマネ・モデル】

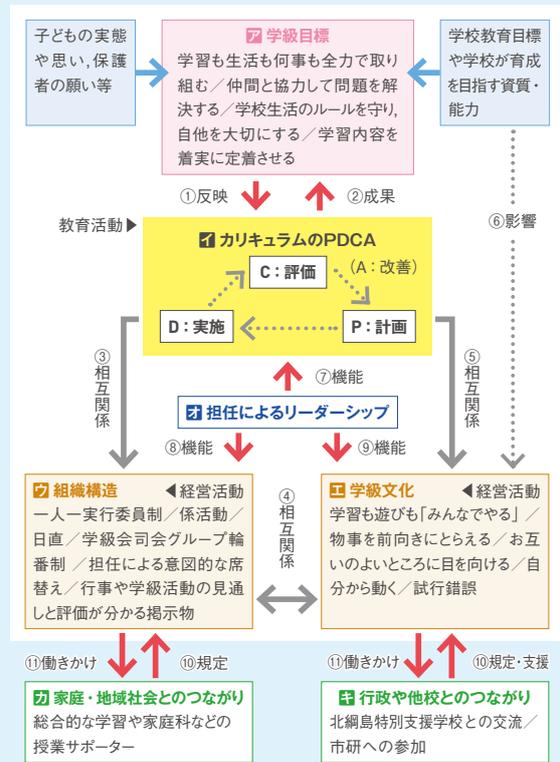
前回述べたように、カリキュラムマネジメント（以下、カリマネ）を「学校のカリマネ」「各教科等のカリマネ」「学年のカリマネ」「学級のカリマネ」といった「教師の指導のカリマネ」と「子ども一人一人の学びのカリマネ」の5つのレベルで提案している。

今回は「学級のカリマネ」について触れる。「学級担任レベルでカリマネをとらえる」という考えは、すでに鳴門教育大学大学院の平成16・17年度のゼミ生の江口慎一氏（平成18年）の研究にある。田村知子氏のカリマネ・モデルを学級レベルにつくり直し、当時総合的な学習で深く関わっていた酒井達哉氏（現武庫川女子大学准教授）の実践を分析した。

図は江口氏の考えを参考にして田村氏のモデルをベースに筆者が作成したものである。なお、リアリティを高めるために具体的な内容については横浜市立北綱島小学校の國分享子氏（2017）の平成28年度のカリマネ学級経営案の記述の一部を活用させていただいた。

同じ学年でも学級によって子どもの実態は異なる。「学校のカリマネ」や「学年のカリマネ」を基盤とした上で、子どもの実態や思いと保護者の願いとともに学校教育目標及び学校が育成を目指している資質・能力を踏まえて、「1年後の子どもの姿」を思い描く（「ア.学級目標」）。できれば子どもたちと作りたい。その実現に向けてどのような授業をつくり上げていくのか、その基本方針が「イ.カリキュラムのPDCA」のPに該当する。日々の授業がDであるが、その中で短期的なPDCAが回る。子どもの理解や意欲の状況を踏まえた授業の工夫・改善が日々繰り返される。國分学級では、子どもの振り返りを軸に子どもとともにPDCAを回し、その成果を視覚化し保護者に発信している。研究授業後や長期休暇中にPの見直し・改善を行う（C・A）。機能的な班編成や係活動、教室環境等

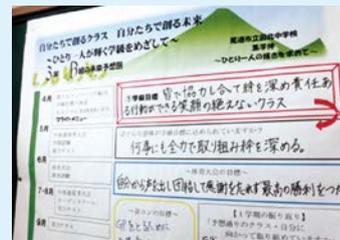
が「ウ.組織構造」、学級の雰囲気や共有されている考え方（主体的・対話的で深い学びの基盤となる「支持的で協働的な関係」が望ましい）が「エ.学級文化」である。そのほか、「オ.担任によるリーダーシップ」（江口氏は「教師の信念」としている）、「カ.家庭・地域社会とのつながり」、「キ.行政や他校とのつながり」（江口氏は「学年団・全校組織」としている）とした。



MANAGEMENT POINT カリマネの枠組みで学級経営をとらえる

- 子どもの実態や思い等を基に子どもとともに学級目標をたてる
- 日々の子どもの状況を踏まえ目標実現に向けてPDCAサイクルを回す
- 機能的な組織と支持的・協働的な関係づくりが学級を活性化させる

写真は尾道市立因北中学校の平成28年度の教室の掲示物である。生徒一人一人が学級目標を考え、班で整理し、学級で決めた目標掲げるだけでなく、その実現のために日々の授業にどう取り組むのか、学校行事にどう参加するのかを記述している。そして、学期末に見直し・改善を図っている。まさしく子どもたちによる「学級のカリマネ」である。小学校の高学年以上では可能な取り組みである。



【参考文献】

江口慎一（2006）「学級担任レベルのカリキュラムマネジメントによる分析」, 村川雅弘・酒井達哉編著『総合的な学習実化戦略のすべて』日本文教出版, p.138-147 / 國分享子（2017）「学級活動計画とカリキュラム・マネジメント」『授業力&学級経営力』（2月号）明治図書, p.26-27 / 村川雅弘（2016）「生徒が創る学級カリキュラムマネジメント」, 村川雅弘『ワークショップ型教員研修 はじめの一步』教育開発研究所, p.123

野口先生のアクティブ・ラーニング教室



野口 徹

山形大学准教授。専門は生活科・総合的な学習。著書に『子どものくらしを支える教師と子どもの関係づくり』（ぎょうせい、共編著）など。

平成29年の新学習指導要領の告示に引き続き、夏には各教科等の学習指導要領解説も公表されました。今回の学習指導要領におけるキー・ポイントは「資質・能力の育成」。そして、それを支える「主体的で対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」です。この「主体的で対話的で深い学び」。イメージしやすい「主体的」「対話的」に比べて、「深い学び」については「？」という学校も多いようです。中教審最終答申には、子どもが①学びの過程の中で②教科等の「見方・考え方」を働かせ、③知識を相互に関連付けてより深く理解し、④情報を精査して考えを作り出し、⑤問題を見出して解決策を考え、⑥自分の思考から創造をしていこうとする。これが「深い学び」だ、と示されています。どれをとってもなるほど「深い学び」の感じが伝わってくる要素です。そのなかで一際目を引くのが、②の「知識を相互に関連付けてより深く理解」ではないでしょうか。一度学んだ様々な知識どうしが結びつき意味がより深くなる、ということが今までの教室の中ではあまり見かけなかったことがない、と思われるからです。教科書に示されている知識、例えば「正方形は、四つの辺の長さが等しく、四つの角が直角の四角形」という知識は正確に記憶することが大事で、これに別の知識をつなぎ合わせて意味を更新することは多くはなかった。深い学びはそれを求めているのです。

教科書などに示されている、「〇〇は△△」である、と主語と述語で語られ、世の中で共通認識されている知識を心理学では「宣言的知識」と呼ぶようです。この知識を記憶するのが「勉強」と考えている人も多いことと思います。ただ、こういった知識を記憶するにはそのこと自体に興味湧く人でないと食指が動かない。それでも「テストに出るから」と暗記しようと頑張ってみますがうまく行かなくて、だんだんとその知識自体が嫌いになってしまう。そんなことになっては元も子もありません。宣言的知識を子ども自身が興味を抱き、さらにその意味を更新しながら深く理解する。「深い学び」は、結構難しいことのように思われます。

そんなときに、ある授業を見ていて「あ、これだ！」と思われたことがあります。それは、札幌市立北九条小学校での1年生の生活科「シャボンだまであそぼう」という授業でした。校庭で無心にシャボン玉と格闘しています。一人ひとりの持ち物が違います。骨だけにしてあるうちわ。丸く変形させたハンガー。ストローも先が四角い形になっています。骨だけうちわでシャボン玉をつくっていた子が「たくさんできた。僕は風と友達になれた！」と叫びました。うちわを振らずに大量にシャ



ボン玉をつくったこの子は、「風の向きに沿ってうちわを構える」ことがコツだとつかんだようです。四角ストローの子は、「おかしいんだよ、どうしても四角いシャボン玉にならない。どうしても丸くならない」と言います。

質の高い「手続き的知識」をデザインする



校庭での活動が一段落すると教室に戻りました。黒板には「シャボンだまけんきゅうじょ」と書かれ、さらに「大きい」「小さい」「たくさん」「がったい」「かたち」と書かれています。その言葉の周囲には子どもたちの名前を示すマグネットも貼ってあります。どうやら、どれを意識してシャボン玉を作るのかを決めていたようです。さらに実行するための「どうぐ」と「わざ」も書いてあります。なるほどシャボン玉遊びはちゃんと「じっけん」だったのです。黒板の左には笑顔、右には困った顔のイラストが貼ってあり、子どもは、校庭での「じっけん」の結果を考察し、もう一種類の自分の名前を顔の下に貼って着席しました。

先生は、「じっけんをしてみても、みんなに教えたいことはありますか」と問いかけました。全員が挙手し、自分の体験から発見した情報を語っていきます。いわく「風と友達になるコツ」「四角いストローでも丸くなる」などなど。先生は「じっけん」の様子を撮影した写真を見せて状況を想起させて、「風と友達になるには『向き』と『風の強さ』が大事」のような細かいニュアンスも引き出します。そのうちに黒板は「シャボンだまのじっけん」から得られた情報で一杯になりました。これを見た子どもは「あー、わかった。」とか「どうしてだろう」とか「次はあれをやってみよう」とかつぶやいています。そして、そのつぶやきをカードに書いていました。

この授業こそが、まさに子どもたちが自ら知識を獲得している場面なのではないでしょうか。子どもたちは①つくりたいシャボン玉とそれに適した道具や技を設定②様々な用具を使って実際に試みる③結果を話し合いながら、わかったことや不思議に思うことなどを交流して記述。こういう手続きを経て、シャボン玉の形や特徴、つくり方などの知識の輪郭を明確にしています。心理学ではこのような知識のことを「手続き的知識」と呼ぶようです。子どもの手続きによって言語化された「手続き的知識」は子ども同士で共有されていきました。

つまり、「深い学び」とは、「手続き的知識」と「宣言的知識」とを、子ども自らがつなぎ合わせ、実感のこもった知識として自らの身体の中に生成する学び、と言えそうです。そして、教師は、宣言的知識を子どもが獲得することに向かうような、質の高い「手続き的知識」をデザインすること。これが今後の授業のカギとなるのでしょう。

1 はじめに

生き物を自分たちで捕まえて飼育する単元において、その動機付けと実際に生き物をみつけたら、捕まえたりのための方法やルールを学ぶ授業を、iPadを用いて試みた。通常は、教師が捕まえ方や校外での行動のルールを伝えるが、iPadを用いることで、子どもたち自らそれらを見出していくという流れへと変化した。

2 学習のゴール

・諸感覚を用いて生き物を探し、捕まえる。

・それに伴い行動のルールづくりを子どもたち自ら見出すことが可能。

3 実践の概要

生き物探し探検のルールを引き出す流れ

①「かくれている(擬態)生き物をさがす」

②「見るだけではわからない」必要な感覚(視覚・聴覚等)でみつける

③「他のどの感覚を使えばよいか?」虫をつかまえるための決め事

④「きく」技を使うのでおしゃべりはなし

目的意識と切実感

「しぜんと友だちになろう」という単元の、めざす具体的な子どもの姿としては「生き物を捕まえることができる」ことである。そのた

めには諸感覚を用いて自然を感じて、感覚を研ぎ澄ませて生き物たちを発見することができる力が必要である。今回の課題は、「1枚の写真」にかくれている生き物を見つけてという今まで鍛えてきた諸感覚を確認するテストのようなものである。iPadの活用でゲーム感覚で取り組み、何とか生き物を見つけたという切実感、そして諸感覚を鍛える具体的なゴールとしての生き物を捕まえるという目的意識をもつことができた。



「なにがかくれているかな?」この写真により、「みる」わざだけでは生き物を見つけていることが難しいことに気付く。

生活科 の 現場から

バーチャルからリアルへの 架け橋としてのiPadの活用

～しぜんと友だち「かくれている生きものをさがせ!!」～

山中 昭岳 (佐藤栄学園 さとえ学園小学校)



「……」
 みんなでつくったルールを守り、諸感覚をつかって友だちと協力しながら生き物たちを捕まえる。



生きものと友だち

学習内容	単元の目標	時数
<p>1 「生き物ゲット!!」作戦会議をひらこう! (2時間)</p> <p>自分たちで捕まえた生き物は自分たちで世話することを知る。生き物を捕まえるために、今まで身に付けてきた諸感覚を活用する。校外学習でのルールについて、自分たちで気付き、つくり上げる。</p> <p>2 生き物たんけんに出かけよう! (2時間)</p> <p>自分たちで決めたルールや捕まえ方を実践する。</p> <p>3 生き物たちのおうちをつくらう! (3時間)</p> <p>捕まえてきた場所や生き物の特徴から、その生き物に合ったすみかをつくる。</p> <p>4 「わくわく生き物ランド」</p> <p>生き物たちをみんなに紹介しよう! (3時間)</p> <p>飼っている生き物の情報を収集し、整理・分析(住んでいる場所や生き物の特徴などで「分類する」思考スキルを活用して)して、観る人にとってわかりやすい場「生き物ランド」を設計、実践する。</p> <p>5 「どうする? 生き物たち」</p> <p>作戦会議をひらこう! (2時間)</p> <p>このまま越冬させるくらいまで世話をしていくのか、もしくは元いた場所に帰すのか、今のすみかの環境、自分たちの能力、生き物たちの特徴など、「多面的にみる」思考スキルを活用して判断する。</p>	<p>生き物を育てる活動を通して、それらの育つ場所や成長の様子に関心を持ち、生き物の成長による変化や生命に気付くことと、生き物に親しみをもち大切にすることができるようになる。</p>	12時間



試行錯誤する

クラス全体で写真をみせて解決していくのでは、気付いた二部の子もだけの活動となってしまう。一人ひとりが自分の考えをもつために、一人一台のiPadに写真を転送し、個人での試行錯誤の時間を与えた。子どもたちはピンチ(指を広げるような動作)をして画面を拡大したり、ドラッグ(指をすべらせる動作)して位置を移動させたりするなど試行錯誤しながら何とか生き物をみつげよつとしていた。実際にみつげられた子どもはわずか、全員が試行錯誤しながらもみつげられない体験をすることで、みる、技だけでは生き物をみつげられないということに気付くこととなる。

バーチャルからリアルへ

子どもたちは写真の中にある生き物を自分の手で捕まえないという願いをもつ。ただゲーム感覚で生き物を

みつげるのではなく、実際の自然の中で生き物をみつげられるようにする方法を模索している。そして、映像から自分たちの考えを見出す。一枚の写真の映像から、その様子や状況を解釈しながら生き物を探することで、映像を読み解く力も養っている。子どもたちはこの写真の中の生き物をどう捕まえたのかを質問してくる。足音をきいてみつげたことから、まぎく、技を使わなければならぬことに気付く。そのことから、生き物探検に出かけるときは、まぎく、技を使うので、おしゃべりは絶対にしてはいけないというルールが子どもたちによって確立されたのである。

4 おわりに

本実践では、バーチャル体験(写真での生き物みつけ)がリアル体験(自然での生き物みつけへとつながるため)には、映像をただみるのではなく、その様子や状況を解釈しながら言葉で表現することの大切さを例示した。すなわち、この写真に写っている虫を捕まえないという切実な思いとともに、映像を読み解く力をも鍛えていくことにつながるのである。そのためには、やはり一人一台のiPadの活用が重要で、個の思考を十分に確保することで子どもたち一人ひとりの試行錯誤を促し、切実感や目的意識を自ら見出し、いくつてこなるのである。



「うーん、どこにいるのかなあ」
 まずは一人でじっくり考え、友だちと互いの考えを交換しながらみつけようとする。



「北斎顔出しパネル」を完成させた子どもたち。
地域参画をしていくことの喜びを体験した。

総合 の 現場から

地域と児童をつなぐ、 地域文化を生かした「地域参画」の実践

墨田区立二葉小学校 6年生「北斎を生かした地域参画」より
「北斎通りまちづくりの会」との連携
松原大樹（墨田区立二葉小学校 主任教諭）

はじめに

墨田区立二葉小学校は、東京の下町文化の残る「兩國」に位置しており、歴史と伝統のある学校である。総合的な学習の時間の実践を行うにあたり、「大相撲」「関東大震災」「東京大空襲」「葛飾北斎」など、様々な学習財が眠っている。

新学習指導要領では総合的な学習の時間の重要性が示されており、「地域に開かれた学校づくり」を推進する上でも、地域単元を開発する教師の能力を磨いていく必要性を強く感じている。今年度は第6学年を受けもち、「地域参画」の単元の開発に取り組んでいる。

単元の実践

① 兩國のよさを?

観光客にインタビューをしよう
はじめに行ったウエビングマップづくりで、児童は、自分たちのまちを、「観光客が多く集まるまち」であるところをさがしたが、「相撲を観に来てるんじゃない?」「江戸博だよ。江戸博+東京見物にしようじゃない」と、地域のよさを真に感じているように思えない実態が見受けられた。その中で、「実際に来ている人たちにインタビューしたい」という思いをもつ児童の意見に合わせて、インタビュー活動を行うこととした。場所は、江戸東京博物館前。平日にもかかわらず、観光客が訪れている。初め覚束ない様子であったが、コツをつかむと次々にインタビューを

することができた。

同様に、観光客のために何かしてきたいという思いをもつ児童が多くいて、徐々に本題である「地域参画」に向けての思いを高めていった。

② どんなことをして

「地域参画」していくか考えよう
インタビューを通して知り得た情報を整理・分析する中で、観光客の人たちの多くが「すみだ北斎美術館」を目的に訪れているということが見えてきた。課題設定の話し合いでは、ピラミッドチャートを活用し、インタビューで得た情報・自分の思い・友だちの思いを「統合・焦点化」していった。「伝統を生かして、観光客に喜んでもらいたい」「北斎の文化を将来につなげていきたい」「オリンピックに向けて、よいまちづくりがしたい」。児童が導いた結論は「北斎を生かして、自分たちも協力して地域を明るくしていく」というものだった。

③ テント横の展示を

どのようにするか考えよう
どんなことができそうか、プレーストリーミングで様々なアイデアを拡散し、最終的に「北斎について調べてまとめたものを掲示する」「ゆ

児童が進めてきた探究の足跡を、教室に掲示している。



地域には北斎の文化を継承しよう

と取り組んでいる団体「北斎通りまちづくりの会」がある。毎年秋に「北斎祭り」を開催・運営し、地域活性のために活動している。児童の関心が「北斎を生かした地域参画」にあることがわかり、児童と北斎通りまちづくりの会をつなぐこととした。すると、児童は「北斎まつり」に向けて協力してほしいという北斎通りまちづくりの会からのメールを受け取る。

このメールを機に、児童は「北斎祭り」を成功させるために自分たちが積極的に関わっていくことと、さらに地域参画についての思いを高めることとなった。

単元計画

主な学習内容	目標	時間
<p>● 両国のよさを考えよう！ (10時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ウェビングマップづくりや、インタビュー活動を通して、自分たちの地域のよさを考える。 ● 自分たちの考えや、インタビューの結果から、地域の特徴や期待されていることを整理・分析する。 ● 地域の特徴と表情から、どのような「地域参画」をしていくことができるか、一人ひとりの思いをもと、それを統合して、課題設定をする。 <p>地域のために！</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 北斎まつりを盛り上げよう！ (20時間) ● 「北斎祭り」に向け、自分たちにどのような取り組みができるかを考える。 ● 考えた取り組みを提案して、運営側の思いや願いを知り、改善案を考え、取り組みを実行する。 ● 活動を振り返り、課題の更新をする。 <p>東京オリエンティック・パラリンピックにむけて！</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 外国人観光客にすみだの文化でおもてなしをしよう！ (20時間) ● 更新した課題解決に向け、具体的な取り組みを考える。 ● 必要な情報収集の方法について考え、実行する。 ● 地域の人たちや地域の機関とかわりながら自分たちの取り組みを推進していく。 ● これまでの活動から自分の成長を振り返り、これからの生き方について考える。 	<p>葛飾北斎の文化を広げたり守ったりしようとしている人々に関わり、自分たちができる活動を実行していくことを通して、次のような資質・能力を育成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 地域の文化である「葛飾北斎」の功績の素晴らしさに気づき、それらの文化を次世代に継承していくこととしている人々とともに活動するための具体的な考えを話し合うことを通して、比較する・統合する・多面的に考えるといった「考える技法」を身に付ける。 ● 観光地として、自分たちができる取り組みを話し合うことを通して、「おもてなし」という言葉についての概念的知識を形成する。 ● 自分たちの課題解決に向けて、必要な情報を集めたり、必要な情報を整理・分析したりして、適切な方法をつくり出し、表現する力を育てる。 ● 友だちや地域の人々と協働にかかわる中で、相互の考えを大切にしたり、課題解決に向けて主体的に活動したりして、地域のために貢献しようとする態度を育てる。 	<p>50時間</p>



グループの話し合い活動では、「どのように考えるか」に応じて、思考ツールを活用している。



自分たちの考えを「北斎通りまちづくりの会」に提案した。地域の人との話し合いを通して、地域参画への意識を高めた。

4 まちづくりの会に提案しよう

まちづくりの会の人たちを教室にお招きして、自分たちのプランを提示することが決まりました。

「顔パネル」「北斎クイズラリーアンケート」の2つをまちづくりの会に提案する。

「顔パネル」は「顔パネル」の項目をあげたマトリクスチャートを活用した話し合いを選択した。その結果、「顔パネル」「北斎クイズラリーアンケート」の2つをまちづくりの会に提案

5 いざ、北斎祭りへ！

北斎祭りに向けて、地域参画への思いを表現する活動に取り組んだ。顔パネルチームは、大きさ・デザイン・強度などをグループで話し合いながら進めた。クイズラリーアンケートチームは、北斎通りに訪れる人の気持ちに立ち、無理矢理感のないやり方や内容について検討を重ね、制作を進めた。「地域参画への思いの作品」を完成させた児童は、次のようにこれまでの学習を振り返った。

おわりに

子どもたちの豊かな成長を支えるために、「地域に開かれた学校づくり」「コミュニティスクール」など、これからますます学校と地域が一体となっていくことが求められる。総合的な学習の時間を通して地域単元を開発し、地域と児童をつなぐいくことは、その理念の実現に向けて重要なことである。そのことを、本実践を通して、児童の姿や地域の方から学ぶことができた。

今回は、福島県会津エリアのご当地キャラとご当地料理をピックアップ！
歴史と文化と自然に感激！「極上の会津」のご当地情報局です。



ご当地 キャラ

Character

あかべえだよ！
ボクに落書き
しないでね！

会津地域の
マスコットキャラクター

あかべえ



鶴ヶ城（国指定史跡・若松城跡）



福島県



こづゆとは…

江戸時代の武家料理であったと考えられる。材料については、時代によりかなり変化するが、現在のような形になったのは明治時代の終わり頃と言われている。当時は、「重（じゅう）」・「大平（おおひら）」などと呼ばれていたが、大正時代頃より「こづゆ」と呼ばれ、貝柱・里芋・きくらげ・にんじん・白玉麩（まめふ）などが材料として使われるようになった。祭りや祝い事の晴れ食として、また冠婚葬祭の膳にも必ず付く伝統食で、干し貝柱で出汁を取り、それぞれの素材の味を感じることができるよう薄味に仕上げる。当時、会津地方では膳料理はほとんど手を付けず家へ持ち帰るという習慣があったため、膳に付く「こづゆ」は何度でもお代わりして良いとされ、膳の中心的な存在であった。手塩皿（てしおざら）と呼ばれる浅めにつくられた小さな朱塗りの椀に盛られる。

（社全国学校栄養士協議会 郷土食の料理集を参考にしました）



「こづゆ大成功！ 元気いっぱい『あいづっこ』。会津若松市立城北小学校では、3年生の総合的な学習の時間『未来へつなげよう 会津のよさ』をテーマに会津の伝統文化を調べる活動の中で『こづゆ』づくりに取り組みました。みんな自分たちでつくったこづゆに大満足。『あいづっこ』たちに人気のメニューです。

つくり方



- ① 乾物を1日かけて戻し、糸こんにゃく、里芋、にんじんを小さめに切る。
- ② 出汁を取ったあと貝柱は取り出さず、そのまま加えて煮込む。
- ③ 火が通ったらほかの材料も加えアクをとり、酒、しょうゆを加え味を調え、白玉麩を加える。

プロフィール

名前	あかべえ
誕生日	ナゾ
出身地	会津地方
所属	極上の会津 プロジェクト協議会
性格	とてもおとなしく、 人なつっこい

会津に
来らんしょ!



好きな
食べ物

会津の美味しいご飯

楽しみ

美味しい郷土料理やB級
グルメを食べること。

名前の由来

あかべえは会津地方の郷土玩具、首振りの張子『あかべこ』がモチーフになっています。写真を撮るときは、横からのアングルをおススメしています。前や後ろから見るとどんな形なのか!? ナゾが多いマスコットです

子どもたち、先生へのメッセージ

みんな毎日学校で勉強に遊びにがんばってんだべ? 美味しいご飯と温泉、歴史がある「極上の会津」にぜひ遊びに来て! あかべえに会いに来てね~!



主な活動

会津地域17市町村（会津若松市、喜多方市、南会津町、下郷町、檜枝岐村、只見町、北塩原村、西会津町、磐梯町、猪苗代町、会津坂下町、湯川村、柳津町、会津美里町、三島町、金山町、昭和村）の魅力を皆さんに伝えるため、会津地方を中心に、時には県外に赴いてPR活動を行っています。



ご当地料理

Dishes

何杯も
おかわり
してください



会津地方の郷土料理

こづゆ

客観的に授業を評価し、課題を明確に捉えられる指標「授業改善シート」

はじめに

生活科目標の資質・能力の三つの柱「(1) 知識及び技能の基礎(2) 思考力、判断力、表現力等の基礎(3) 学びに向かう力、人間力等」を達成していくためには、日々の授業が適切に実施されているかをチェックしていく必要がある。

教師に最も重要な力量は授業力である。子どもたちに生活科のねらいに沿った豊かな体験の場を提供し、活動を深めていく中で子どもたちが新たな課題を見つけ、探究していく環境を創っていく必要がある。

教師はRIPCD Aサイクルを機能させ自身の授業を構築していくことが求められている。

授業改善シートの活用

教師自身の授業については、授業研究会で同僚や先輩教師から適切な指導助言が得られる。しかし、個人として年に何回も研究授業を

する機会があるわけではない。日々の授業が、子どもたちにとっても教師自身にとっても、目標を達成できる満足のいく授業であったかどうかを判断することは困難である。「今日はよかったです」、「今日は不十分だった」と感覚的な評価では、自身の授業力向上には繋がっていない。

そこで客観的に授業を評価でき、しかも自分の課題を明確に捉えられる指標があると便利である。しかも授業力向上に一役買っているとなるとこれを利用するのも一つの方法ではないかと考える。

これまで、授業構築・授業分析の研究を長年続けてきた中で見出した「授業改善シート」を紹介したい。教師も学生も活用することで成果が見られるものである。

授業を10の観点についてチェックしていく。この観点は授業設計を行う上で、子どもが興味・関心を持ち、課題設定し問題解決して

いく過程を包含したものである。授業者にとっては、授業設計や授業後の振り返りに活用できる。また、授業参観者にとっては、授業観察する視点として位置付けることができる。と考える。

「授業改善シート」

① 学習の動機付け・目標の明示

・ 授業の第声で児童の興味・関心をもてる発問や教材を提示する。

・ 本時のねらいに沿った課題を1〜2個出し、興味の持続を図かる。

・ 発問・指示・説明

・ 本時のねらいを確認しながら、発問する。

・ 指示・発問は短く具体的に与える。

・ 自分の発する言葉、児童・生徒の発する言葉に敏感である。

・ つばやきへの対応。

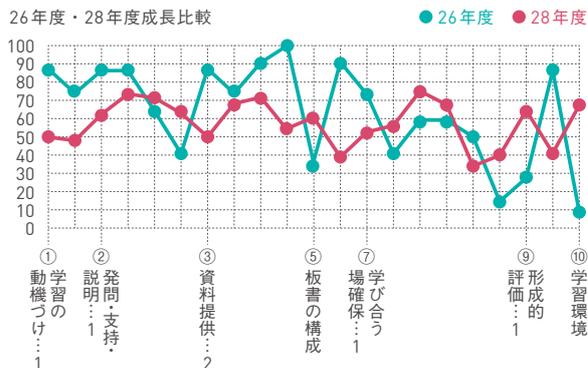
③ 資料提示

・ 自作教材を一つは作っておく。

④ 場の工夫

・ 一問一答式にならないように、

▲ 同じ学生の26年度2年生時、28年度4年生時との成長比較



活動を入れる。(話し合い活動、考えをノートにまとめる、動作化をする)

・ 子どもどうしのかかわりが生まれる場面を意識して作る。(相談・作業・体験)

・ 極力、直接体験の場を大切に。見る、触る、試す、聞くなど。これらが難しいときは間接的に。

⑤ 板書の構成

・ 一時間の流れ(足跡)がわかる板書計画。(視覚的效果(色・矢印・囲み・大小))

⑥ 児童の思考・活動時間の確保

・ 45分間の中で半数以上の児童が何らかの自己表現(発表・動作化)が出来るようにする。理想

生活・総合への提言

「深い学び」を構築するための授業設計とは

は全員が一言でも言えることを目指す。

⑦ 学びあう場の確保

- ・児童の話し合いが広がっていくように助言していく。
- ・発表者以外の子どもを観察。(動き・表情・目線)
- ・子どもの発言に対して、うなずき、問いかけ、ゆさぶりをかける。

⑧ 個への対応・支援

- ・机間指導中は、授業の理解度、姿勢・ノートの使い方、身辺整理の仕方等について気がついた

ことは指導していく。

- ・逸脱行動をしている児童には、授業にかかわりある話をし、注意を引き戻すようにする。

- ・ノートの使い方、丁寧な字が書けているかを机間指導しながら指導していく。

⑨ 形成的評価と柔軟な授業構成

- ・子どもの表情等を確認しつつ、全員を常に視野に入れながら授業を進めていく。
- ・1時間を変化のある繰り返しで組み立てる。

⑩ 学習環境

- ・机まわりの整理整頓ができています。

これら10の観点のなかにある21のチェック項目は、授業で普段から配慮すべき項目と考える。

学生のチェックシートから見えること

グラフは、学生が模擬授業や先輩教師の授業参観でチェックシートを活用した結果を表したものである。Aは、同じ学生の2年時、4年時の授業力の育ちを見たものである。Bは、平成27年度と平成28年度の4年生の成長を比較したものである。このグラフからは、学生はどの項目に課題があるかを見ることができるとともに、授業者である私が27年度に見られた課題をどこまで配慮した講義ができていたのかの判断材料になる。Cは、先輩教師の授業を参観した時の結果である。先輩教師の課題なのか参観者である学生の課題なの

かを探ることができる。

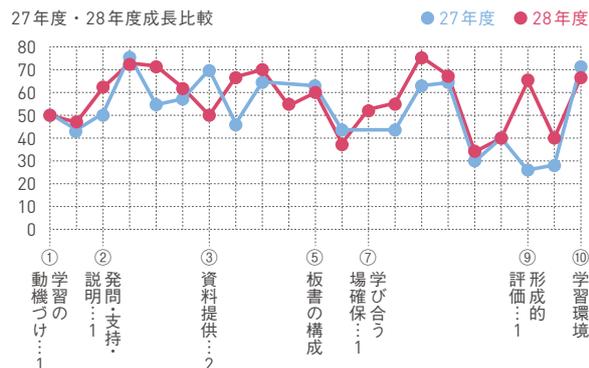
●おわりに

授業改善シートを活用することにより教師自身の授業の傾向をみることができ、次回からの授業の改善点を明らかにすることができ。さらに、繰り返ししていくことで授業力向上につながり、子どもたちにとっても「深い学び」を提供することができる。

日々の授業で授業改善シートを活用することにより「深い学び」につながる授業力をつけていくってほしいと願っている。

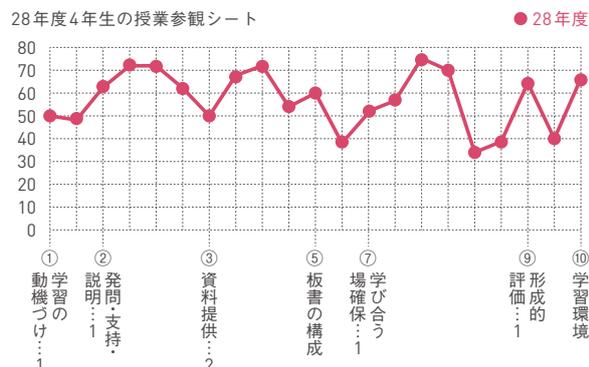
③ 4年生の成長比較

27年度・28年度成長比較



④ 先輩教師の授業参観チェックシート

28年度4年生の授業参観シート



授業改善シートの活用により「深い学び」につながる授業力を



神戸親和女子大学
発達教育学部児童教育学科
藤池 安代 教授



保育所、幼稚園の現場から

港区立南山幼稚園

文責：小久保 篤子（港区立南山幼稚園 園長）

小久保 篤子（こくぼ とくこ） 港区立南山幼稚園 園長

東京の公立幼稚園教諭、副園長を務めた後、教育委員会事務局指導室幼児教育担当専門官として、保幼小連携の推進を図るため区独自の「小学校入学前教育カリキュラム」や「家庭で大切にしたいことハンドブック」の策定に携る。2017年より現職。

本園は、同一敷地内に併設する区立南山小学校内に昭和9年に開園した。平成27年度から3年保育が開始され、平成29年度から独立園となり、専任園長が配置された。高層ビルに囲まれた都会の中にありながら、広々とした校庭や自然豊かな南山の森なども活用し、幼稚園・小学校の連携を図りながら教育活動を進めている。

教育(保育)方針

人権尊重の精神に基づき、心身ともに健康で豊かな人間性と社会性をもつ幼児の育成を目指し、次の目標を設定している。

- げんきな子
- よくかんがえる子
- なかよくする子

地域に親しまれ魅力ある幼稚園に

本園では、①安全で安心な幼稚園 ②幼児が遊ぶことが楽しいと感じ、自己を十分に発揮できる幼稚園 ③保護者・地域から信頼される幼稚園 を目指す幼稚園像に掲げ、幼児・保護者・教師がともに育つ幼稚園経営を進めている。

【合同研究】

平成28・29年度は、港区教育委員会研究パイロット園・校として、「自ら考え、かかわりを深め、豊かな学びを創り出す子どもの育成～育ちと学びをつなぐ幼小連携カリキュラムの工夫～」を研究主題として、小学校・幼稚園の全教職員が「育ちと学びをつなぐ」の共通理解に立ち、連携・協力体制のもとで計画的に研究を推進している。

南山の特色を生かした幼小連携カリキュラムのに基づき、子どもどうしの交流活動や異学年の自然なかかわりを通じた育ち合いや学び合いを大切にしている。

【地域とのつながり】

地域の麻布十番商店街の方を外部講師に招き、親子で味噌づくりを体験したり、子どもたちが麻布十番商店街に出かけ、四季折々の飾りを届けたりして交流を図るなど、地域の方々とつながりを大切にしている。また、南山の森、都立六本木高校の畑を活用し、自然体験をとおして、幼児の知的好奇心や思考力の芽生えを培っている。

連携へのポイント

- ねらいを明確にした互恵性のある交流活動を計画・実践する。
 - 週会議や研究会などで情報を共有する。
 - 研究の視点に沿って、分析・考察する。
- ①視覚化 ②一貫性・連続性 ③活動の工夫



いつでも気軽に行き来できる雰囲気と、幼稚園・小学校の教員どうしが互いに向ける温かいまなざしが、子どもたちの心を育てる。



味噌づくり体験や地域の祭りの参加など、地域の方とのつながりが子どもたちの生活や遊びに豊かさをもたらす。

好評
発売中

日文の書籍シリーズ

森の学校・海の学校

～アクティブ・ラーニングへの第一歩～

発売中



アクティブ・ラーニングの 授業がわかる待望の一冊!

森や海を題材にした全国8地域の小学校の授業を作家が取材し、ルポルタージュ形式に書き下ろした読みごたえのある内容。

編著 NPO法人 共存の森ネットワーク

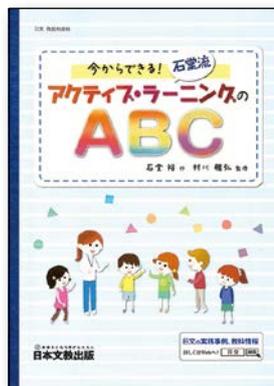
監修 村川雅弘(鳴門教育大学大学院)

藤井千春(早稲田大学)

定価 **1,998**円(本体1,850円+税8%)

A5判 192頁 ISBN978-4-7830-8016-9

発行 三晃書房



今からできる! 石堂流

アクティブ・ ラーニングのABC

無料
配布中

校内研修などで広くお使いいただいています!

アクティブ・ラーニングのABCは日文Webサイト内で無料公開中!

日文 アクティブ・ラーニング

検索

※冊子ご希望の方は、小社大阪本社業務部(TEL:06-6695-1771)までお問い合わせください。

お求めは、最寄りの書店でお願い致します。

※商品のお問い合わせは、お手数ですが、裏面所在地より小社大阪本社業務部へお願い致します。

スマートフォンやタブレットをかざすと動画が楽しめる!

- 1 スマートフォンまたはタブレットで、ストアアプリを起動します。
- 2 「カザスマート」で検索し、アプリをダウンロード。
- 3 「カザスマート」アプリを立ち上げます。
- 4 ARマークがあるページで紙面全体にかざすと、動画が始まります!



★P.1(特集), P13(ご当地情報局)で視聴できます。
※動画は、2018年4月30日まで視聴することができます。

理科 とつなく



草花の成長に伴うさまざまな変化に気付かせる。

自然の変化に気付ける力を養う

自然の事象は絶えず変化している。例えば、草花の様子の変化には著しいものがある。蒔いたヒマワリやアサガオの種は発芽すると力強く土を持ち上げる。やがて本葉を出してぐんぐん成長し、開花、結実する。

子どもは世話をしながら、その変化に不思議さを感じるだろう。また、発芽から結実までの成長に伴う、さまざまな変化にも気付くだろう。理科の学習では、事象の変化に気付けることが重要である。生活科のさまざまな活動の中には、事象の変化に気付ける場面がたくさんある。子どもの気づきを適切に評価して、自然の変化に気付ける力を養いたいものである。

POINT

1. 自然の不思議さを感じる感性を育てる。
2. さまざまな活動の中で事象の変化に気付かせる。
3. 変化の気づきが科学性の芽生えにつながる。

小林 辰至

上越教育大学大学院教授。
1952年、岡山県生まれ。専門は理科教育学。タンポポの教材化に関する研究で、兵庫教育大学から博士（学校教育学）を取得。



生活科を

「つぶやき」を尊重する

子どもたちの「つぶやき」を禁止してはいけません。教師の投げかけや友だちの発言を聞き、それを面白いと感じた瞬間、その心の動きが「つぶやき」となって表現されるからである。

「つぶやき」は「話を聞いている」、「心が動く」のでなければ出されない。それを禁止することは、聞くことや心が動くことの禁止につながる。「つぶやく」ことができるから、教師や友だちの話を聞き、「心が動く」ことを見つけようと意欲的になる。「つぶやき」は、その子どもの学びが「主体的」となっていることの証拠なのである。

「主体的な学び」や「対話的な学び」を開始させる上で、子どもの「つぶやき」を尊重して、動き出させることから始めなければならない。



「つぶやき」から意欲的な活動が開始されます。
(日本文教出版 平成27年度版生活科教科書 下P.82)

社会科 とつなく

POINT

- 1 「つぶやき」を禁止してはいけません。
- 2 「つぶやき」から「主体的」な学び*、「対話的」な学びが始まる。
- 3 「つぶやき」を尊重し、意欲的な学習活動を生み出すことに教師の指導力が示される。



藤井 千春

早稲田大学教育・総合科学学術院教授。博士（教育学）。1958年千葉県生まれ。茨城大学助教授などを歴任。ジョン・デューイの哲学と教育学を研究。

生活&総合navi vol.74

日文教育資料[生活・総合]

平成30年(2018年)2月1日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社

〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

Cover photo: KONISHI TAKASHI

Design: KURAHASHI JUNPEI (KN.PLANNING)

CD33388

日本文教出版 株式会社

<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市中区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690